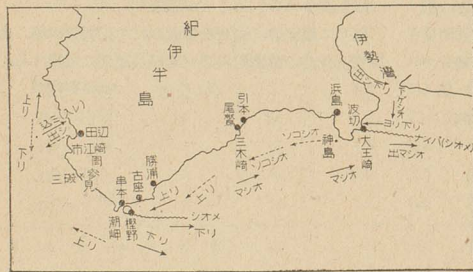


和歌山，三重兩縣下のシオ

宇田 道隆

我が國の漁業者中には澤山の漁や潮，天氣に關する傳承，俚諺が行はれ，其の中には立派な科學的の寶物を含んでゐる。言はば磨かれざる玉である。これ等を各地方の方々と協力して發掘採集し，飾をかけ，磨きをかけて科學的なものにし，日本獨特な研究としてまとめ上げるやうにしたい。其の一端にもと思ひ筆者が昭和 12 年春蒐集した資料の一部を掲げよう。各地の方々に亡佚せられないうちに惜氣なく此のやうな資料を本誌に發表して頂きたいと希望する。勿論玉石混淆で誤つた経験もないと云へぬし，適用範圍の狭いものもあるから科學的に吟味されないものを鵜呑みは禁物である。本調査は和歌山，三重兩縣水産試験場の援助を得て田邊，串本，古座，勝浦，尾鷲，引本，濱島，波切の各漁港に行つて，漁業組合の好意により各地元の經驗豊富な漁



第 1 圖

業者 數人（古老，中老，壯年者を打ち混ぜて選定せられた）に就て質問した結果の副産物である。主題は黒潮の變調の資料調査で，これは其後實際觀測を行つた成績の報告（水産試験場報第 10 號，昭和 15 年）に載せてある。次に記す「上リシオ」は紀伊半島では上方へ上るの意味で，西岸で北上流，潮岬附近では西行逆流，東岸で南西流を指して云ふのであり「下リシオ」は反對のシオで，潮岬附近では東行流，紀伊半島東部の三重沿海で云ふ「マシオ」とは強い東行流のこと云ひ，「底シオ」或は「逆シオ」とは潮岬の方へ向ふ反對の流れである。即ちシオといふのは海潮流であり，又ある系統の海水といふ意味を含んでゐる。「クサレシオ」といふのは汚ない水色をした腐つたやうな海水が現はれてゐるといふ意味である。（第 1 圖参照）

(1) 資料

[1] 和歌山縣田邊にて調査

- (イ) 東風吹くとき「下リシオ」速くなる。シオから知らず。「シモゲヅイタ」といふ。西風吹いても其の割合にシオは動かぬ。
- (ロ) 落日和（天候悪化）になると「下リシオ」速くなる。日和直るとシオなをる（天候恢復すれば，海潮流も常態に恢復する）。
- (ハ) 「下リシオ」は夏秋岸につける。シオメが岸に寄り，シオ速くシオメも多い。夏土用の時シオは沿岸に速い。近年變調でシオがとまりアチコチ變る
- (ニ) 「寒ジオ」（寒中のシオ）は一名「マダグロシオ」といふ。黒潮系統の美しいシオが差す。
- (ホ) 「下リシオ」では「上シオ」（上層の潮）が速い。「上リシオ」では流速は上

下餘り變りがない。

(へ)「出シドリ」(下リシオで岸から沖へ拂ひ出すシオ)では磯藻草も落ち(枯れ)るといふ位大不漁。

(ト)潮岬で「下リシオ」の時は田邊の方は「上リシオ」、潮岬で「上リシオ」の時は田邊方面のシオは一定せぬが「下リシオ」が多い。

(チ)「入レ下リシオ」は沖から岸へ差しこんで来る下リシオ、「合ヒシオ」(ワイシオとも云ふ)は逆流で暖流が岸から離れた時に現はれる。

(リ)「下リシオ」と「下リシオ」の合目ではシオが一番強く、渦巻があつて船でもキリキリ廻される。浮流物がすべて其のシオメに集まる。風のよい日でもジャブジャブ鳴るシオメがある。

(ヌ)黒潮は普通紀州西岸の三ツ磯附近に突きかけて分れ、一分枝は下リシオとして潮の方へ、一分枝は上リシオとして田邊の方に向つて流れる。

(ル)一般に沖から流入する潮は暖かく、沿岸から沖へ拂ひ出す潮は冷たい。

(ヲ)「みさき(潮岬)三日ごち(東風)」といつて、東風が三日續いて吹く。(暖流)と風が逆のため海が非常に荒く波立つて帆船時代には大變難儀した。上リシオの時は海穏やかである。

(ワ)土用になつて照つて来ると上層下層のシオ大きく變動する。上層は上リシオ、底のシオは下リシオで底のシオに負けることも度々ある。

(カ)シオが秋(舊八、九月)に年により一日に何十回と桶に入れて水を廻すやうな狂ひ方をすることもある。夏の土用時分にシオあち廻りこち廻りすることある。焚入網を終夜張り直して網にならぬことがある。

(ヨ)時化(低氣壓)が来るとシオ狂ひ易い。

## [2] 串本

(イ)上リシオ(合ひシオともいふ)は暖いシオで魚集らない。東へ流れる下リシオは藍の花のやうな色、シオメの所に魚が集まる。シオメを境に上リシオ、下リシオ白木綿と黒木綿を突き合はしたやうに見える。

(ロ)天氣の變り目にシオ狂ふ。シケのする直ぐ前シオが變る。

(ハ)「舊二月のシオグサリ(潮腐り)」。青菜のやうな水色。この時餘り漁ない。

(ニ)三ツ磯のうちつけて潮岬を東南(イナサ)か東に流れるシオは壽命が永い。潮岬込ミシオになつたなら長く續かぬ。もの廿日も續いて行かぬ。

(ホ)シオにも壽命がある。シオ一代は十年。下リシオ十年は行かぬ。何十年も續いては流れぬ。

(ヘ)寒と土用にシオが變つたならば其のシオは大體續く。寒ジオが粘り強く流れると異變が少ない。

(ト)舊七、八月秋ジオは一番流れが強い。

(チ)東風吹くとシオに逆らひシオメ際立つて波立つ。西風には波立たぬ。風を見て波の折れ方からシオ判断する。

[3] 古座 上リシオ(合ヒシオ)は青白いが下リシオは真黒いよいシオ。

(イ)地方(沿岸)は東風吹くとシオ東から来る。

沖では東風吹くと「下リシオ」盛んになる。シメゲヅイタといふ。「日和はシメゲぢや。沖や白波ぢや」といふ。

(ロ)えらい日和(時化)の前にはシオ速し。

(ハ)「舊二月のクサレジオ(腐れ潮)」。赤イヤウナヨゴミ潮、これが来ると漁悪い。イカなど漁れないし、魚浮く。

(ニ)「下リシオ」が地方(沿岸)から始まらねば本當にならぬ。(本當のシオの状態に恢復しない)。

(ホ)「入レジオ」(込みシオと同じ)は續かぬ。

(ヘ)「上リシオ」「下リシオ」に壽命があるかと思ふ位普通は「下リシオ」だけが流れる。

(ト)「舊六月の照りジオ」はシオ速い。

(チ)沿岸に二重潮。(普通樫野崎より沿岸)

(リ)南風吹けば良いシオづける。春(三、四月)多い。

[4] 紀州勝浦 下リシオ(ホンシオ)は東へ行くシオ。上リシオ(合ヒシオ、舞ヒシオともいふ。沿岸反流の意味)は西へ行くシオ。

(イ)東風のとき「下リシオ」速い。南一南東一東南東の沖から吹く風では下リシオ沿岸に寄る。春夏に多い。

(ロ)「舊二月ニガシオ(苦潮)」。寒グサリ(腐り)幾らか赤味さした黄緑色をした濁リシオ。寒シオ付けてから春シオに變る境に来る。魚浮き鮑死ぬるといふ。「ぶり」漁の知らせ。富士山から来る雪水とも云ふ。

(ハ) 暖流の北東へ寄せるシオは永く續かぬ。陸へつけるとシオたるむ。南東へ流れるシオは永く變らぬ。

(ニ) 「下リシオ」は行きかかると十年位續く。

(ホ) 「下リシオ」の一番強いのは(舊)三、四、五月。冬は暖流緩い。

(ヘ) 沿岸に二重潮多し。

(ト) 下リシオ速いほど上リシオ速くなる。

[5] 三重縣尾鷲 マシオ(北東流)底ジオ(南西流)は上リシオともいふ。

(イ) 東風吹くとき逆らふシオ(下リシオ)利いて来る。

(ロ) 沿岸二、三尋のウワツラ(表層)は風なり(風の通り)に動く。

(ハ) 冬西風吹くとシオ利く。

(ニ) 腐れジオは淺黄色、時期はいつとはつきりしない。

(ホ) 寒中「眞シオ」強いとそれが五、六月迄續いて来る。

(ヘ) 「秋の下リ(シオ)は夢にも見ない」といふ。秋は上りのツケジオが多い。マシオは冬に多し。舊九月上リコシオ強い。

(ト) 底シオ上(層)緩りても下層速い。眞潮は上だけ速い。

[6] 引 本

(イ) 冬のシオ西風吹くと込むこと多し。春のシオ風につれてよくいく。秋のシオ風に逆らふ。イナサ(南東風)吹くときは地からシオ出す。シオから先知らず。

(ロ) 照りになるとソコジオ多し。梅雨の時はソコジオ。8月になるとシオ揃ふ。之れ迄揃はぬ。

(ハ) 日和悪くなるとシオはどちらにも動くが、地(沿岸)から底シオになるのが多い。シオの1日2日前シオ出していく。

(ニ) (沖)シオは風に逆ふ。沿岸のシオは風なりに動く。

(ホ) 舊2月赤シオ(ヨゴミ色、シオ腐る)多い。

(チ) マシオ續かぬ。底シオで入レシオの方が強い。

(ト) 33年位せぬとシオ直らぬ。30年ばかりシオ下つて又30年とまつて又下る。たまに3年上リシオの間にも下るのを入れて週期10年位。

(チ) 寒中には餘りマシオつけぬ。下リシオになら

ない。寒にシオが下れば今年は漁がよいとしたもの。

(リ) 春は一番(強く)シオ掛け、マシオが多い。魚が多く、コミシオ(入レシオ)につける。

(ヌ) 底シオは下層ほど速い

(ル) 二重ジオは5、6、7月に多く、シオ狂ふ。

[7] 濱 島 シオの名稱はマシオ、ソコシオ、寄リシオ(込ミシオ)、出シオ(サカリシオ)

(イ) マゼ(南風)吹くとシオ寄せる。西風吹くと沖へ張り出す。風につれてシオ動く。

(ロ) 天候變る前の日位からシオ速くなる。大抵沖のシオが寄せる。日和もどれば(天候恢復)直きもとへ戻る。

(ハ) 水シオは2、3月頃と舊6、7月初め。

(ニ) 「貝寄せジオ」は3月頃来る。雪融け水ともいひ、伊勢灣の水が東へ流出するものともいはれる冷たいシオ東から来る。蝦刺網に鮑、鱒螺などかかる。

(ホ) 「ミサキ(潮ノ岬)のシオも片行きに行かぬ。」(一方向にのみ流れない)。35年で一循環する。

(ヘ) 寒シオつけたら夏シオがつける。寒と夏の土用にシオは一番よく動き速い。

(ト) ソコシオはマシオより緩やか。

(チ) ナイバ(シオメのこと)はザーザー音がする白波が立つて波が舟に飛びこむこともある。

[8] 波 切 南より北へ上るシオをマシオ、北より南へ下るシオを下ゲシオ、反流をワイタ、シオメをナイバといふ。

(イ) 寒マシオの時西風吹く。東風吹けば沿岸は南東流、沖は變りない。西風寄せるシオに多い。南風(夏のもの)上リシオ風なりにゆく。

(ロ) 時化の前には下ゲシオ速い。シケの2、3日前からシオ狂ふ。天氣が直ればちぎ戻る。

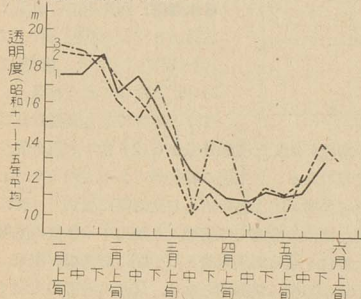
(ハ) 「貝寄せジオ」黄赤色、舊2月頃-3月。この時は八丈島あたりいつでも(海の色)悪いシオ。これは底のシオが上に浮くシオ。上下シオがかへるといふ。これがくると漁だめになり、鮑、蛸死んで浮く。

(ニ) マシオ寒中に強い。夏緩い春相富、秋は行かない。

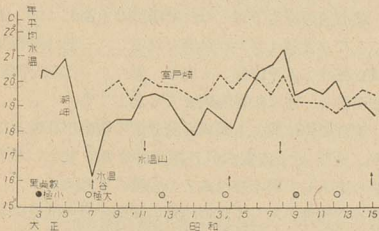
(ホ) 寒マシオかければ其の年豊漁。マシオはかなり續く。

(へ) (ト) 10月 (チ) 境つる。 (みこ) (リ) から (2) したも (1) (2) なる (3) (4) ので (5) (6) まで 20 透明度(昭和十一年五月) 18 16 14 12 10 第 三 甲 五 甲 四 甲 三 甲 二 甲 一 甲

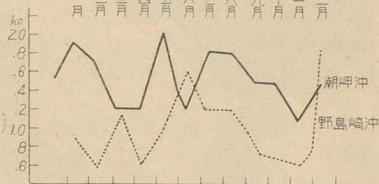
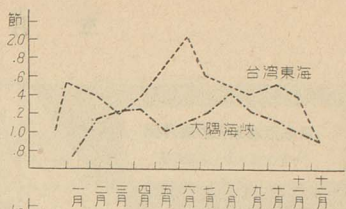
- (へ) 下ゲシオ速い時は減多にない。
  - (ト) 二重ジオはごく岸近くの 2, 3 湊内で、厚さ 10 間位のうちマシオ二間位。
  - (チ) ナイバ大王崎北東にある。御前崎の方まで潮境つづいてゐる。其の傍餌魚、小魚、かつを集まる。伊勢灣から水シオ出る。ナイバで渦巻いて揉みこまれる。
  - (リ) 水シオ 8, 9 月頃距岸 2 湊位にわたる。伊勢灣から出て熊野灘の岸を傳つて紀州の方へ流れる。
- (2) 考察 上記の傳承には殆んど共通したものがある。
- (1) 東風吹く時下リシオ(黒潮暖流)が増勢する。
  - (2) 天候悪化すると時化の一兩日前からシオ速くなる。
  - (3) 3 月頃シオが腐つたやうになり變色する。
  - (4) 向岸流は變動多く永續させぬ。急潮の如きものである。
  - (5) シオに 10 年とか 30 何年とかの長年變化あり
  - (6) 冬季のシオはかなり持続性を有し、初夏の頃まで續く傾向がある。



第 2 圖 熊野灘及び潮岬附近透明度變化 (1. 賢 2. 九木崎 3. 熊野崎)



第 3 圖 水温の長年變化



第 4 圖 黒潮流速の季節的消長 (大正 14 年~昭和 10 年海流通報による流速平均)

- (7) シオの季節的變化は 7 月頃の夏にシオ最も速く、冬にも多少はやい。
- (8) 沿岸に上下層の流向異なる二重ジオが多い。

以上のうち (1), (2) は他地方にもあること故確からしいが吟味は將來に譲る。(3) に就ては第 2 圖を作つて見たが確かに 3 月に入つて透明度が急減して 1, 2 月迄の澄明とは 7-9 m といふ格段の差を示す。5 月中旬頃から少し恢復に向ふ。この「潮腐り」は化學成分の分析と生物への影響を是非課題として研究したいものである。(5) (6) は筆者が前に發表した報告(東北海區に於ける海況の變動に就て、水試報告第 9 號昭和 13 年及近年本州南海黒潮流域に於ける海況の異状と漁況との關係、水試報告第 10 號昭和 15 年)と一致する。第 3 圖は潮岬方面の水温變動例で、11 年位の太陽黒點週期と略合つてゐるのが注意される。

水温の谷が黒點極小年に近く、水温の山が黒點極大年に近く出現してゐる。(7) に就ては第 4 圖で見るやうに夏 7, 8 月頃冬 1, 2 月頃流速の速い傾向が見える。(4), (8) は後日の問題とする。

水産試験場技師 理學博士